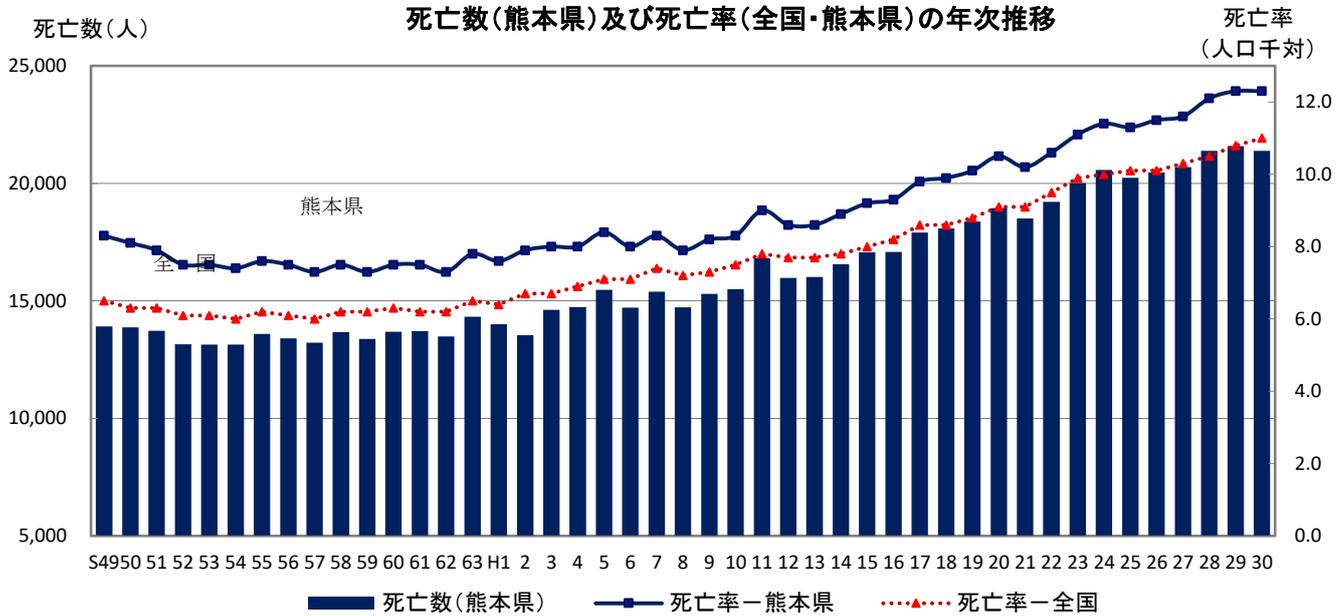


### 3. 死亡

#### (1) 死亡数が、出生数を7,079人上回る

平成30年の本県の死亡数は21,380人で、死亡率（人口千対）は12.3で前年と同率だった。また、全国の死亡率（人口千対）は11.0で、前年より0.2ポイント増加した。

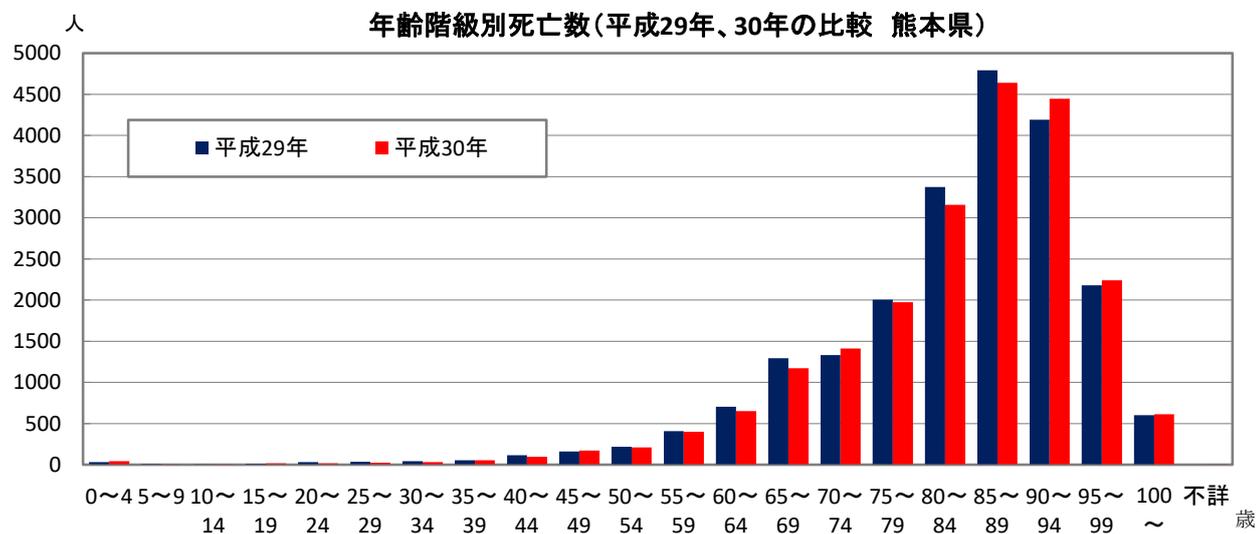


資料) 厚生労働省「人口動態統計」

#### (2) 平成30年の死亡数は、前年に比べ208人減少

本県の平成30年の死亡数は、前年より208人減少した。前年と比較すると、年齢階級により増減は様々だが、全体で見ると1.0%の減となっている。

また、最も死亡数の多い階級は、85～89歳の4,639人、次いで多い階級は90～94歳の4,448人であり、この2階級をあわせると、全体死亡数21,380人の42.5%を占めている。

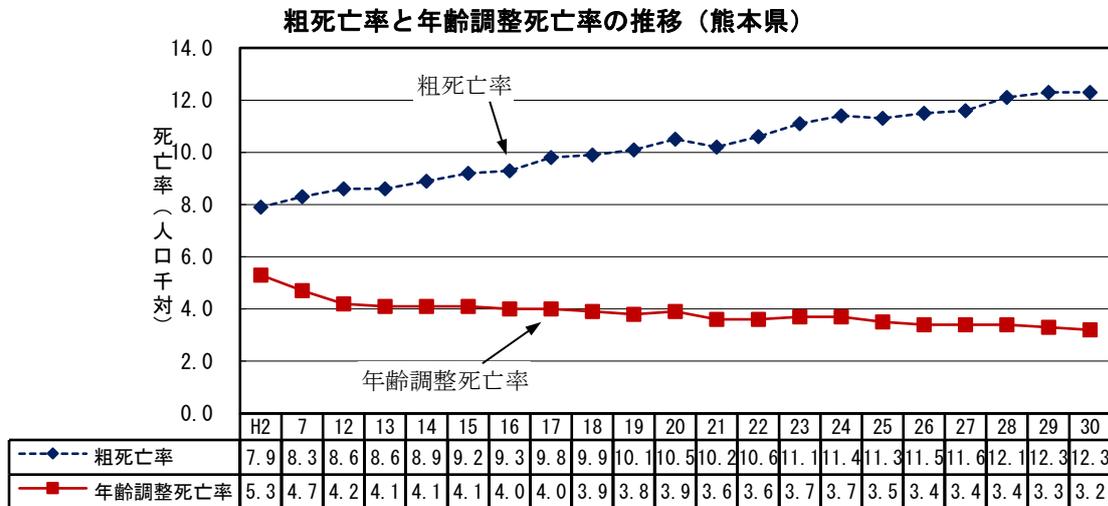


資料) 厚生労働省「人口動態統計」

### (3) 年齢調整死亡率は3.2（人口千対）

本県の平成30年の粗死亡率（人口千対）は、12.3で前年と同率だった。昭和60年全国モデル人口を基準に人口構成を補正した平成30年の「年齢調整死亡率」は、前年より0.1ポイント減少し3.2であった。

※「年齢調整死亡率」の算出方法については、本書の巻末「用語等の説明」参照。



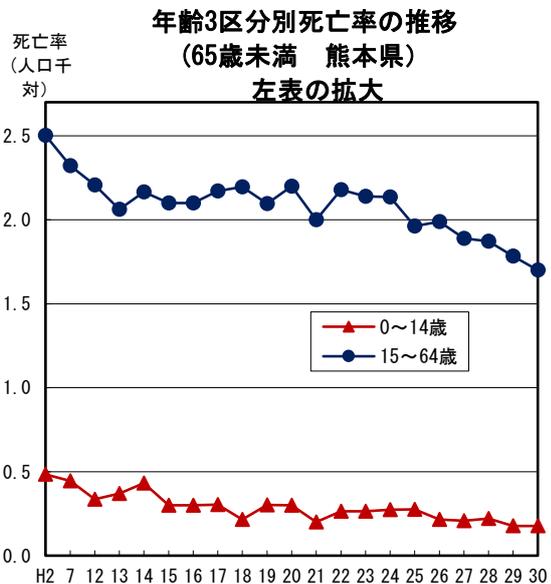
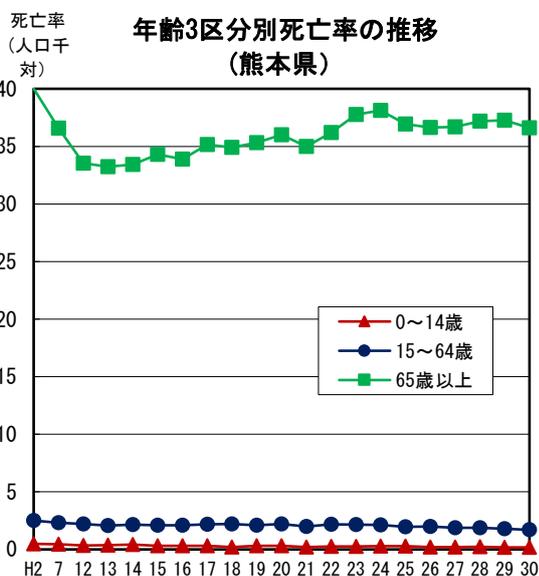
注) 1) 年齢調整死亡率の基準人口は、昭和60年モデル人口である。

2) 粗死亡率は、年齢調整死亡率と比較するために粗死亡率と表現したが、単に死亡率と呼んでいるものである。

資料) 厚生労働省「人口動態統計」

### (4) 年齢3区分別死亡率は、65歳以上が0.7ポイントの減

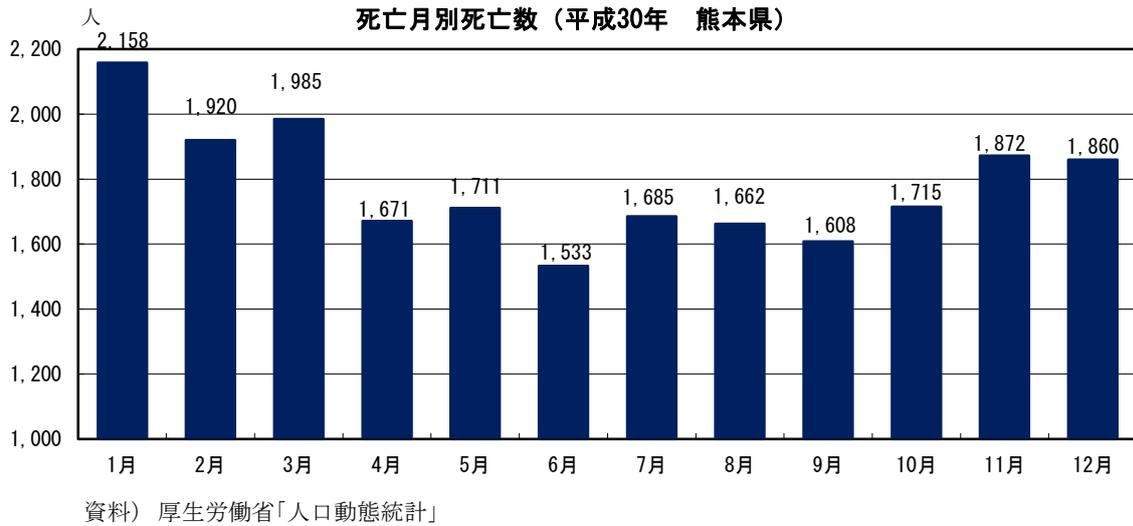
死亡率（人口千対）の年次推移を年齢階級3区分別にみると、平成30年は0～14歳が0.2で前年と同率、15～64歳が1.7で前年より0.1ポイントの減、65歳以上が36.6で0.7ポイントの減であった。



資料) 厚生労働省「人口動態統計」

(5) 死亡数が多い冬期

死亡数を月別にみると、寒くなる11月から3月にかけて多くなっている。



(6) 全国より高い主な死因別の死亡率（人口10万対）

平成30年の主な死因別の死亡率（人口10万対）を全国値と比較すると、主な死因では肝疾患と自殺を除き本県の方が高くなっている。

**主な死因による死亡率（人口10万対） 熊本県と全国との比較**

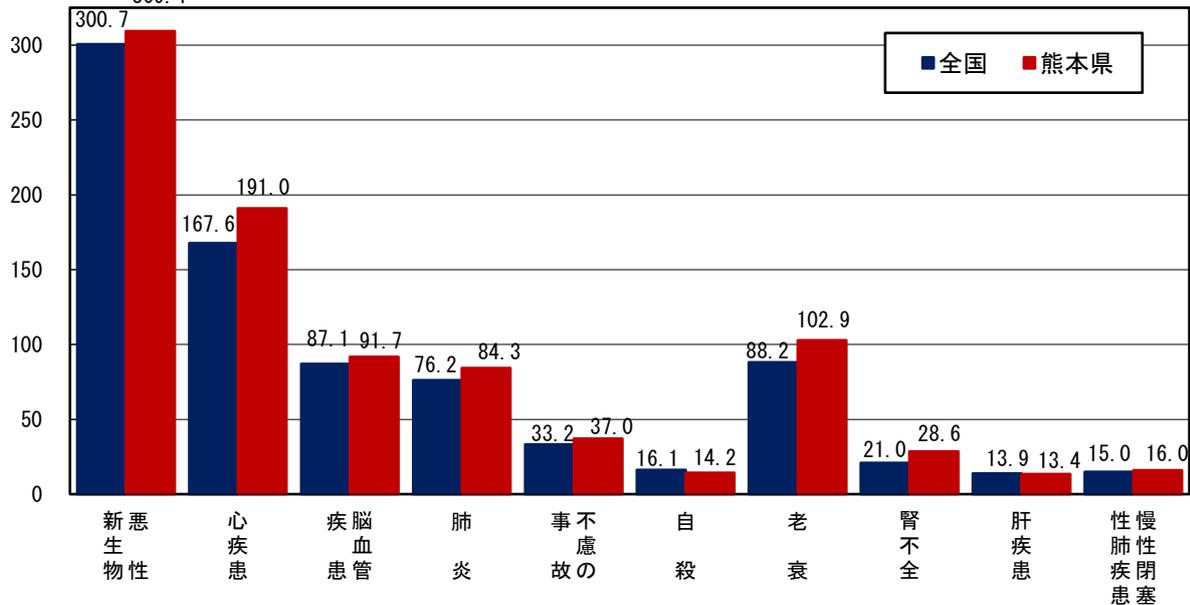
平成30年

死 因	熊本県 死亡数	熊本県 死亡率	全国順位 (降順)	全国 死亡率	全国1位 (降順)	全国47位 (降順)
悪性新生物	5,393	309.4	28位	300.7	秋 田 県 424.0	沖 縄 県 216.1
心疾患	3,329	191.0	22位	167.6	愛 媛 県 247.9	沖 縄 県 118.9
脳血管疾患	1,598	91.7	31位	87.1	岩 手 県 161.2	東 京 都 65.4
肺炎	1,470	84.3	22位	76.2	高 知 県 127.2	沖 縄 県 47.1
不慮の事故	645	37.0	28位	33.2	秋 田 県 54.3	沖 縄 県 19.0
自殺	248	14.2	41位	16.1	和 歌 山 県 21.2	徳 島 県 12.4
老衰	1,793	102.9	21位	88.2	山 形 県 155.8	福 岡 県 57.9
腎不全	498	28.6	10位	21.0	徳 島 県 35.6	神 奈 川 県 14.0
慢性閉塞性肺疾患	279	16.0	29位	15.0	和 歌 山 県 24.2	愛 知 県 10.3
肝疾患	233	13.4	26位	13.9	沖 縄 県 21.8	滋 賀 県 8.7

	熊本県	全国順位	全国	全国 1 位 (降順)	全国47位 (降順)
65歳以上人口の割合 (H30.10.1人口推計：総人口)	30.6%	23位	28.1%	秋 田 県 36.4%	沖 縄 県 21.6%

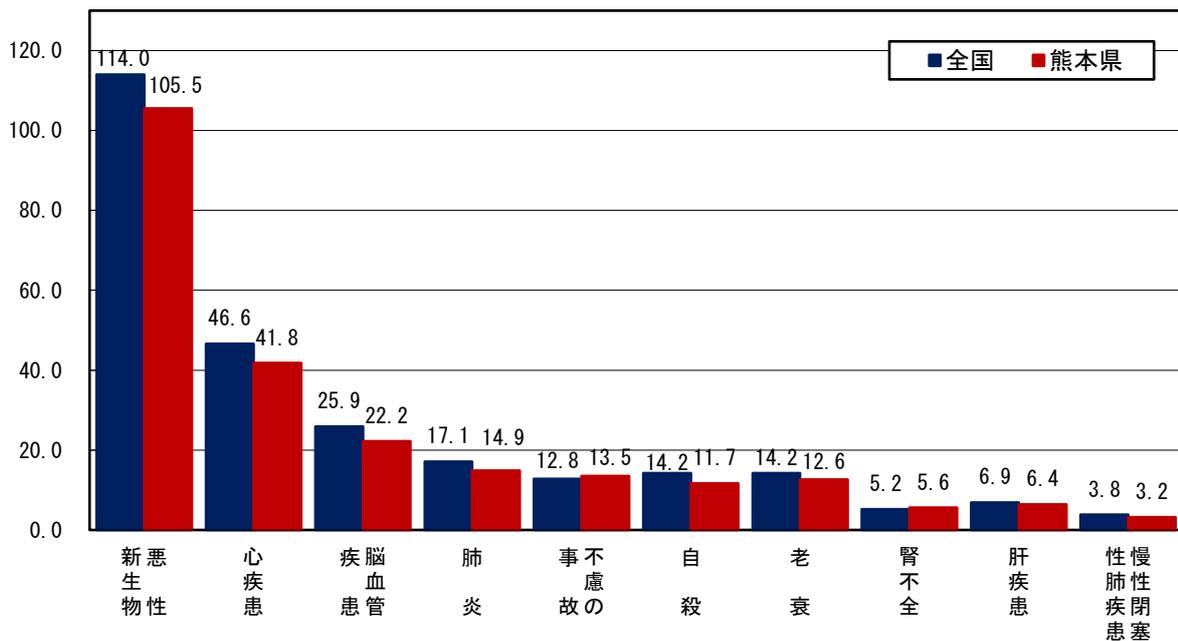
資料) 厚生労働省「人口動態統計」

率  
(人口10万対)  
309.4  
主要死因別粗死亡率の県と全国の比較（平成30年）



注) 粗死亡率は年齢調整死亡率と比較するために粗死亡率と表現したが、単に死亡率とよんでいるものである。  
資料) 厚生労働省「人口動態統計」

率  
(人口10万対)  
主要死因別年齢調整死亡率の県と全国の比較（平成30年）

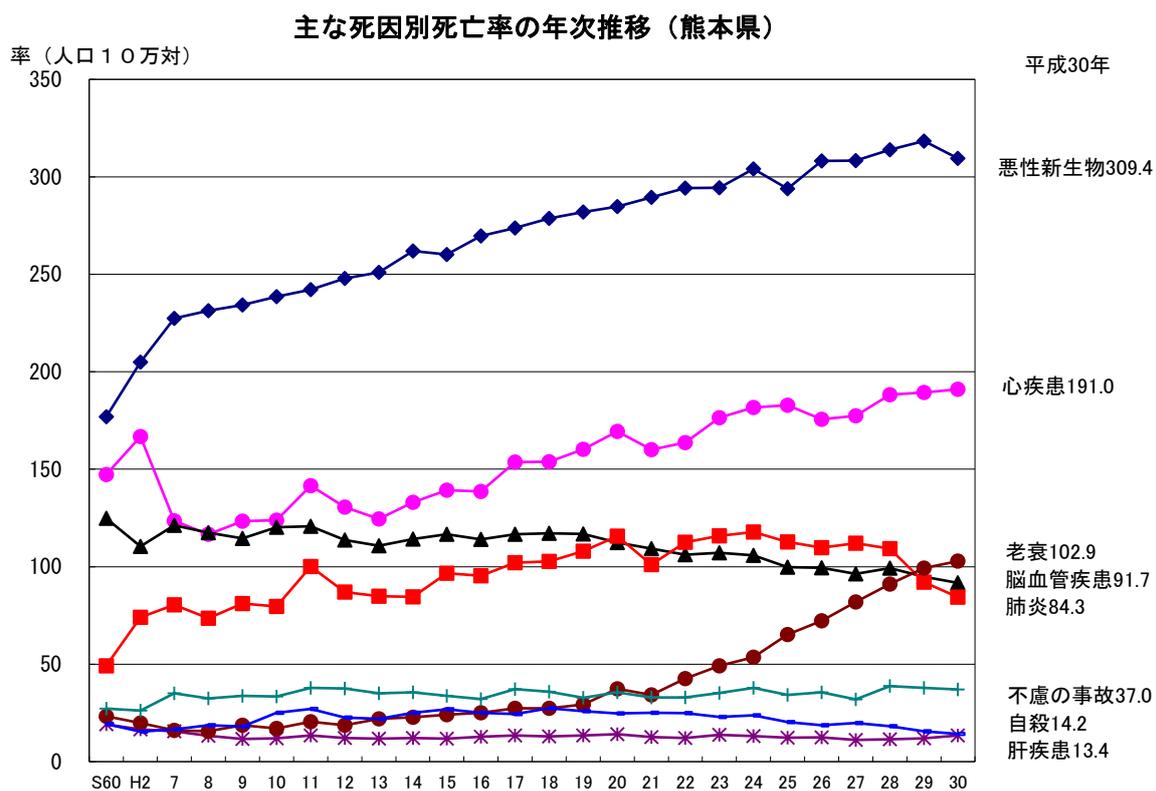


注) 年齢調整死亡率は、昭和60年全国モデル人口を基準とした。  
資料) 厚生労働省「人口動態統計」

(7) 平成30年の主な死因別死亡率は、心疾患、肝疾患、老衰が増加

平成30年の本県の主な死因別死亡についてみると、悪性新生物の死亡数が5,393人で、死亡率（人口10万対）は309.4であり、死亡総数の25.2%を占めて死因順位の第1位となっている。第2位は心疾患、第3位は老衰だった。

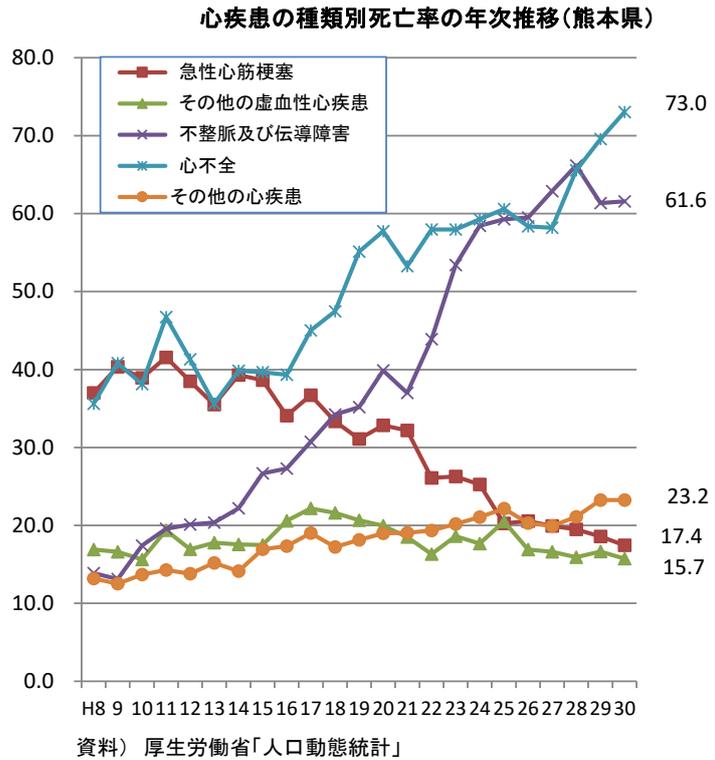
なお、平成6年から平成7年にかけての死因別死亡の急激な変化は、国際疾病分類の第10回修正（ICD-10）の影響によるものと考えられる。



注) 平成7年から疾病分類が変更されたため、「肝疾患」は平成6年までは「慢性肝炎・肝硬変」  
資料) 厚生労働省「人口動態統計」

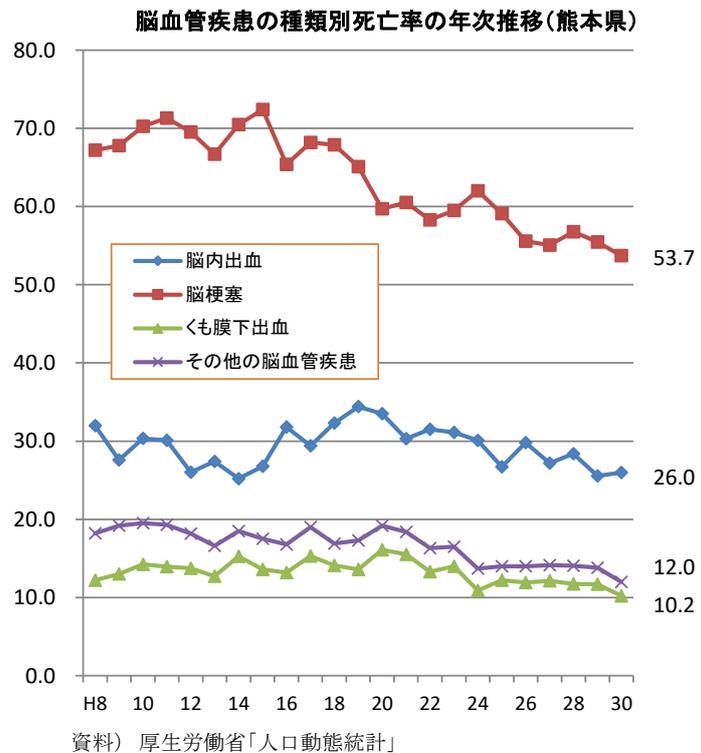
(8) 心不全が1位

本県の心疾患の種類別死亡率の年次推移をみると、平成30年は心不全が、不整脈及び伝導障害を上回った。



(9) 脳内出血は前年より0.4ポイント増加、その他は減少

本県の脳血管疾患の種類別死亡率の年次推移をみると、平成30年は脳内出血が0.4ポイント増加し、その他は減少している。

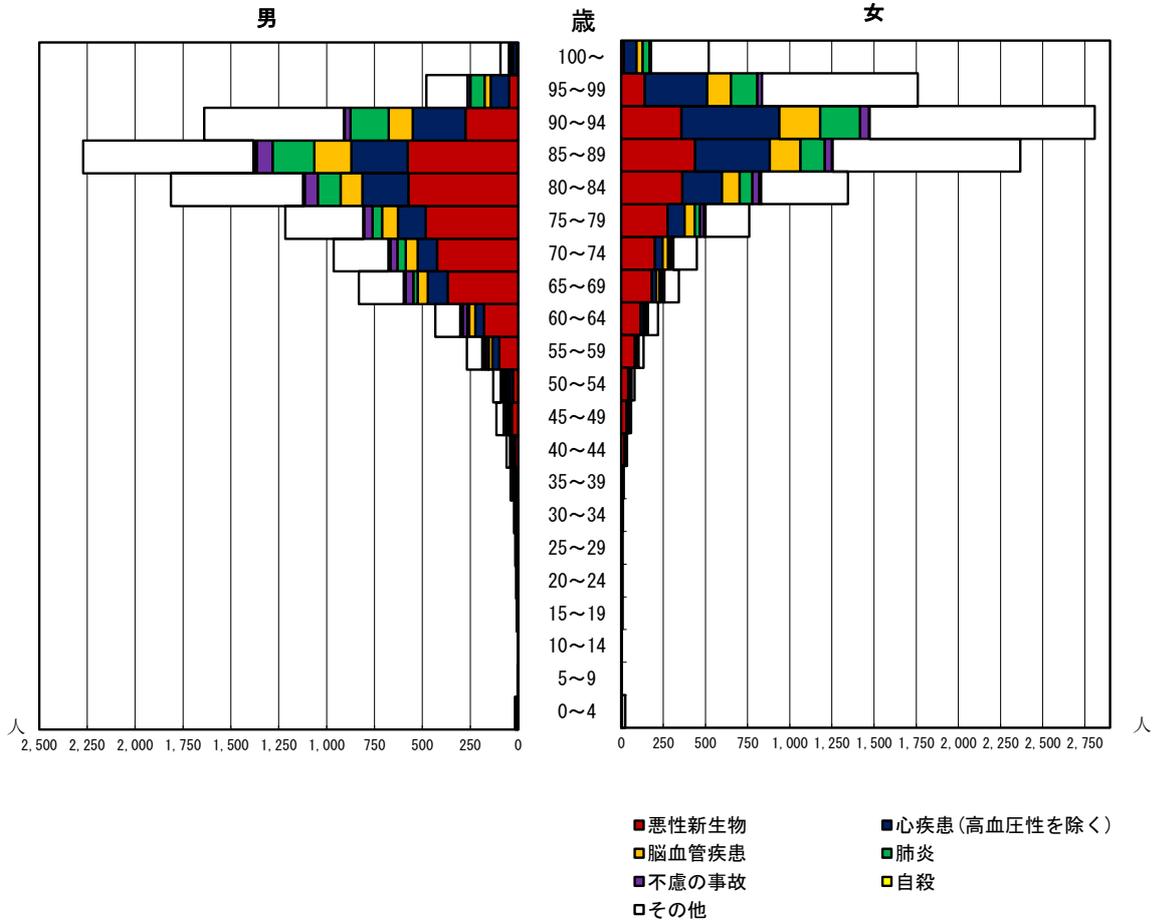


(10) 悪性新生物による死亡数は、男性は85歳～89歳で最多、女性は90歳～94歳で最多

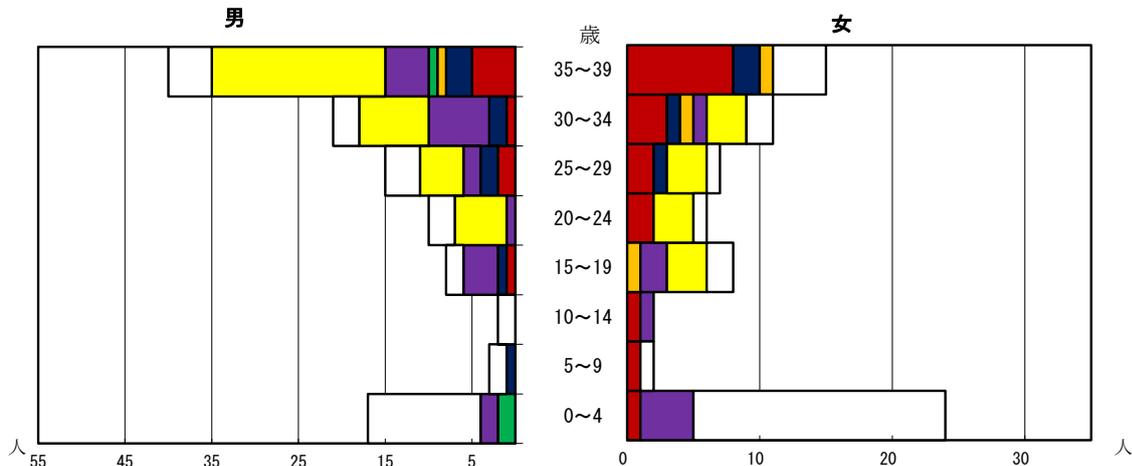
本県の平成30年の死亡数を主な死因別でみると、全体では男女とも1位悪性新生物、2位心疾患であるが、年齢階級別でみると、その構成は階級毎に大きく異なる。

また、39歳以下においては、男性の死因の最多は自殺の39人、次いで不慮の事故の21人、女性の死因の最多は悪性新生物の18人、次いで自殺が12であった。

性・年齢階級別にみた主な死因の死亡数(平成30年 熊本県)

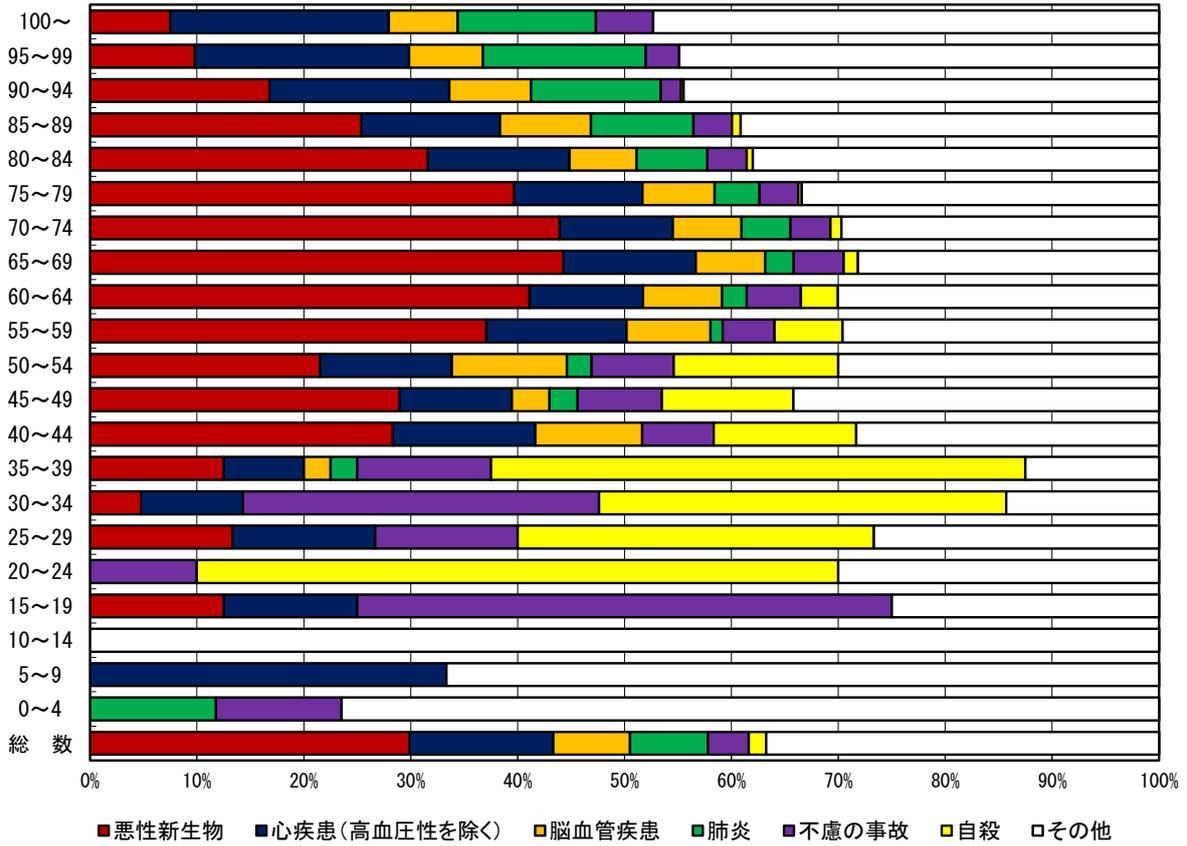


40歳未満の性・年齢階級別にみた主な死因の死亡数(平成30年 熊本県)

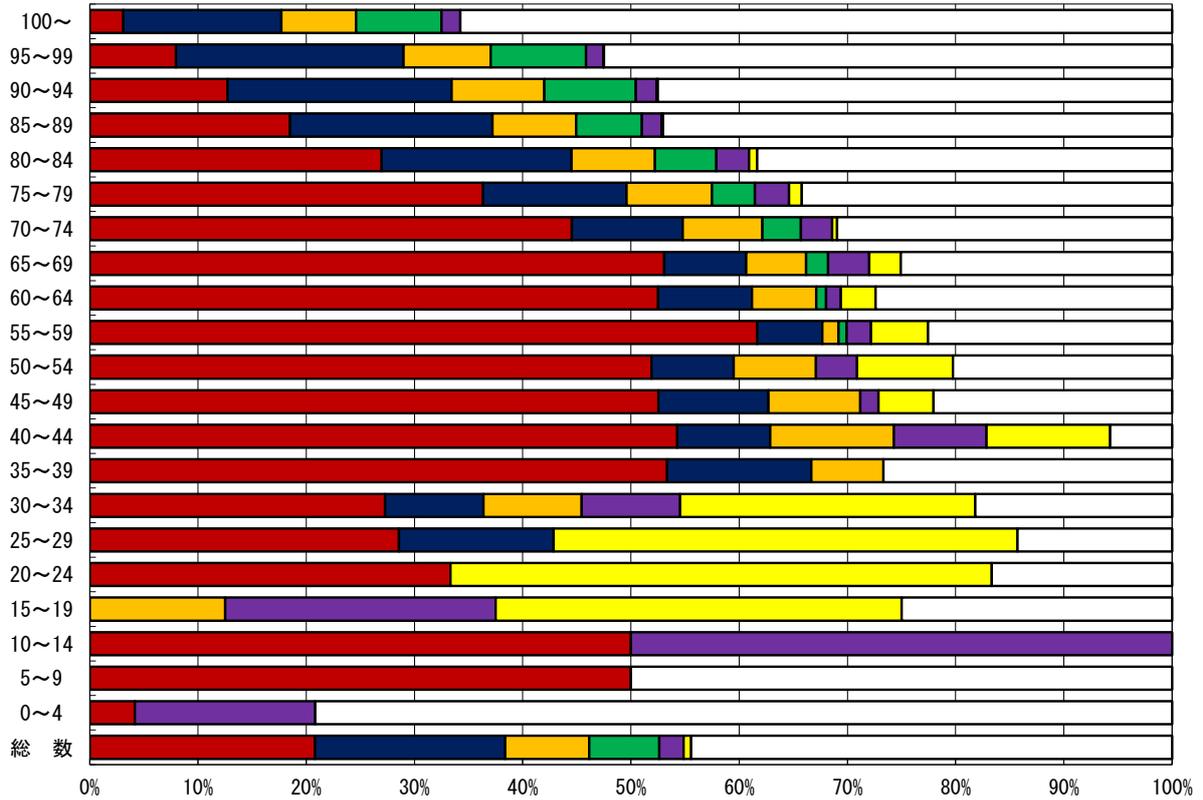


資料) 厚生労働省「人口動態統計」

性・年齢階級別にみた主な死因の構成割合(平成30年 熊本県・男)

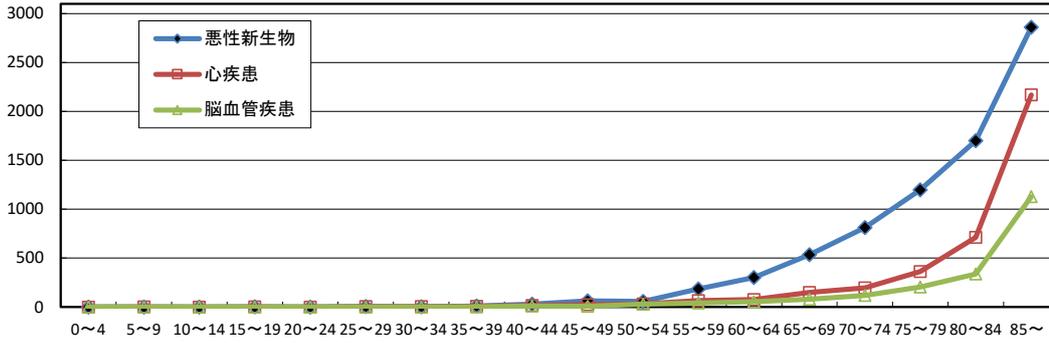


性・年齢階級別にみた主な死因の構成割合(平成30年 熊本県・女)



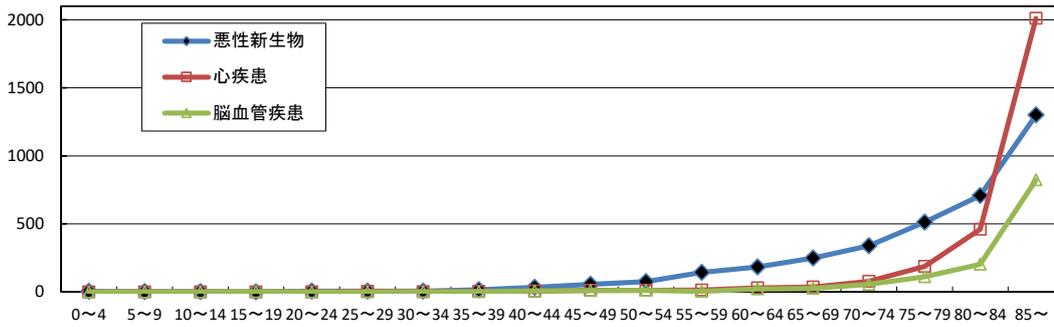
死亡率  
(人口10万対)

### 3大死因の年齢階級別死亡率 (平成30年 男 熊本県)



死亡率  
(人口10万対)

### 3大死因の年齢階級別死亡率 (平成30年 女 熊本県)



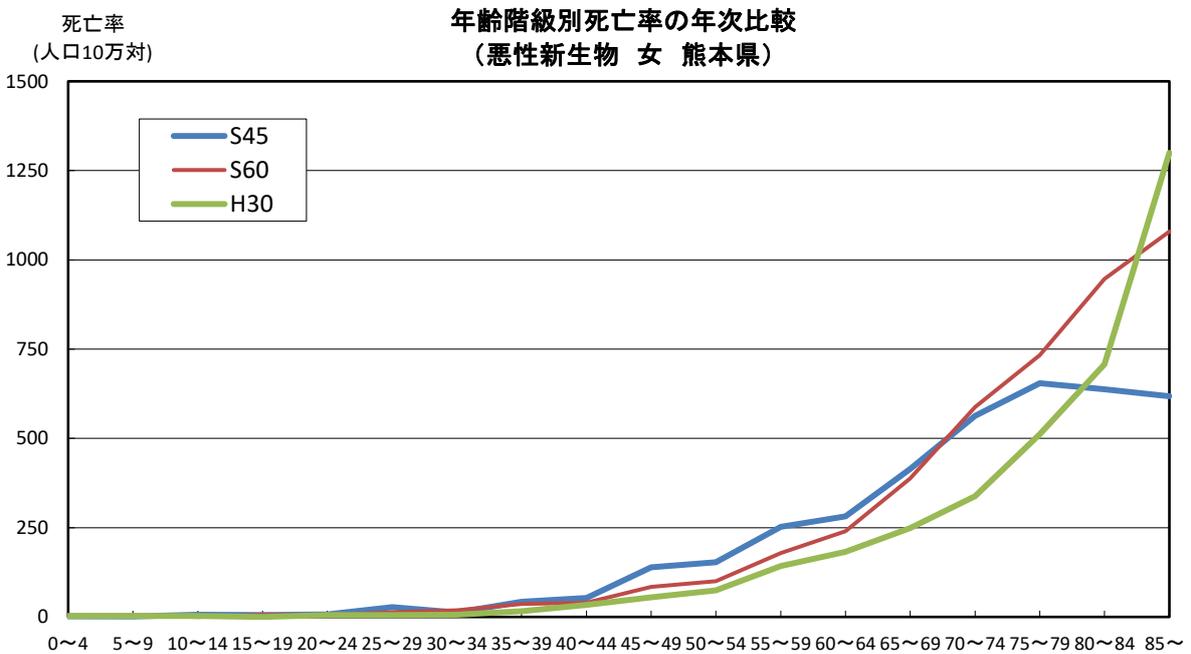
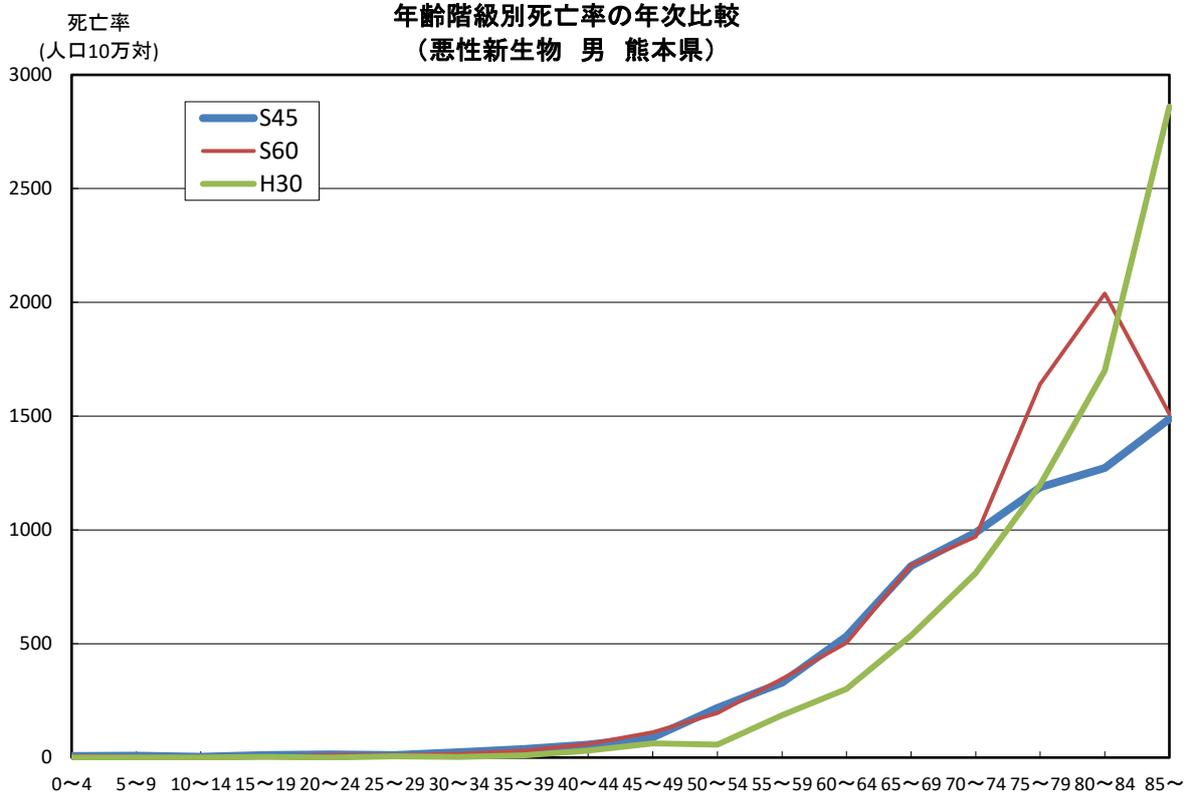


**(11) 昭和45年、昭和60年と比較すると心疾患、脳血管疾患は減少、悪性新生物は85歳以上で増加**

3大死因の年齢階級別死亡率（人口10万対）を年次別（昭和45年、昭和60年、平成30年）にみると、平成30年の悪性新生物は男女とも85歳以上で大幅に上昇している。

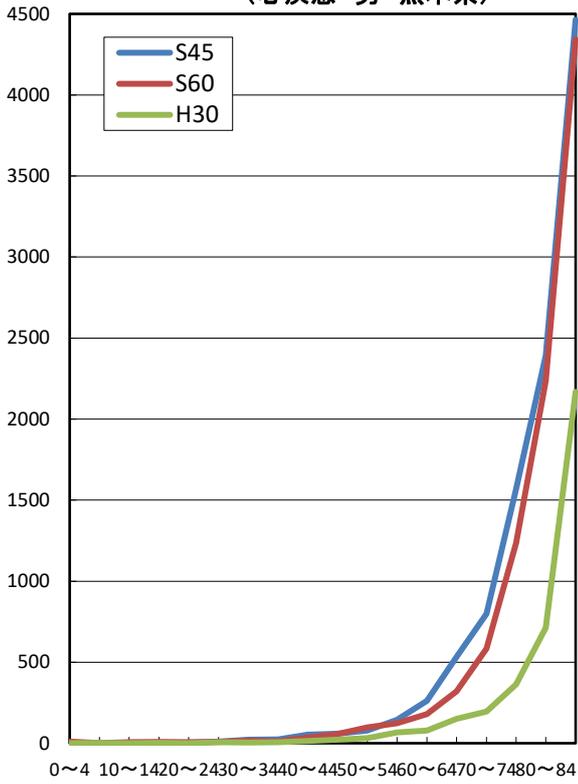
心疾患、脳血管疾患は年次別にみると各年齢層とも大幅に低下している。

なお、心疾患の減少については、平成7年に行われた死因分類及び死亡診断書の改正の影響によるところが大きいと考えられる。

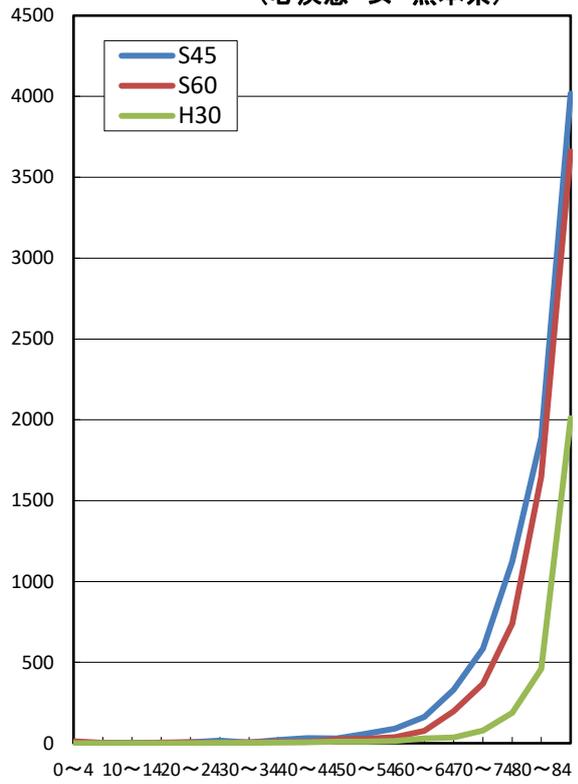


資料) 厚生労働省「人口動態統計」

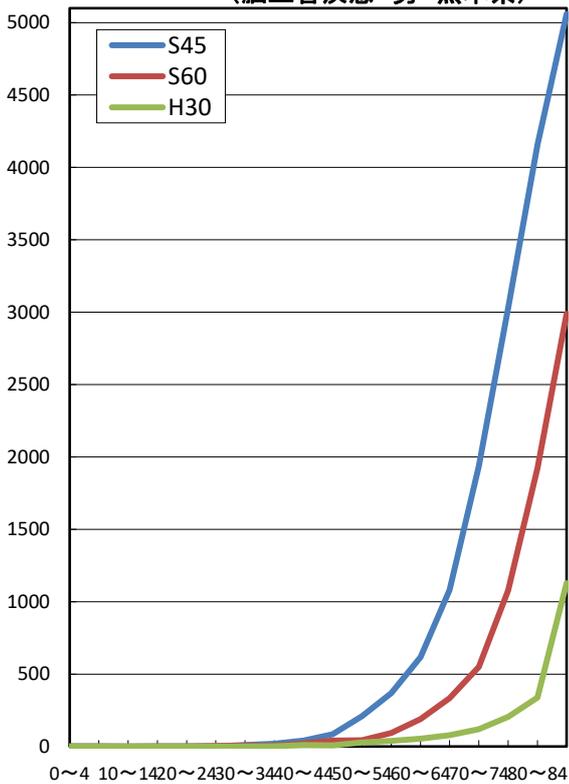
死亡率  
(人口10万対) **年齢階級別死亡率の年次比較**  
(心疾患 男 熊本県)



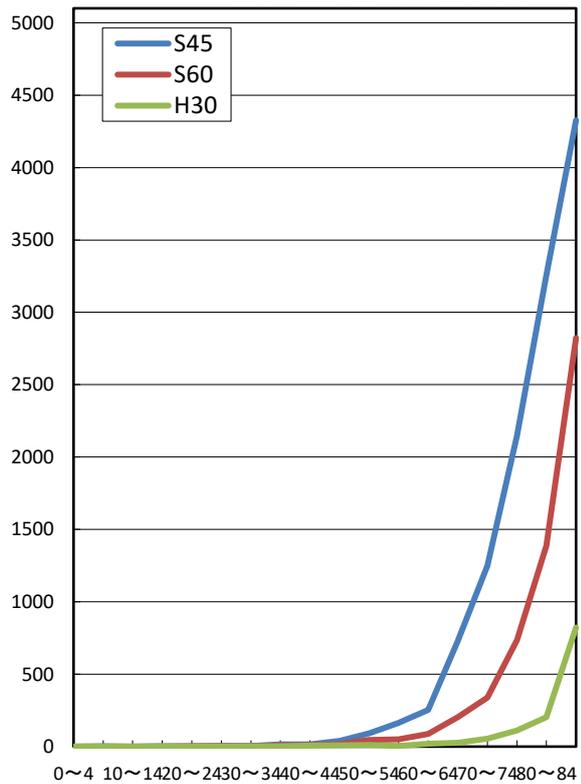
死亡率  
(人口10万対) **年齢階級別死亡率の年次比較**  
(心疾患 女 熊本県)



死亡率  
(人口10万対) **年齢階級別死亡率の年次比較**  
(脳血管疾患 男 熊本県)



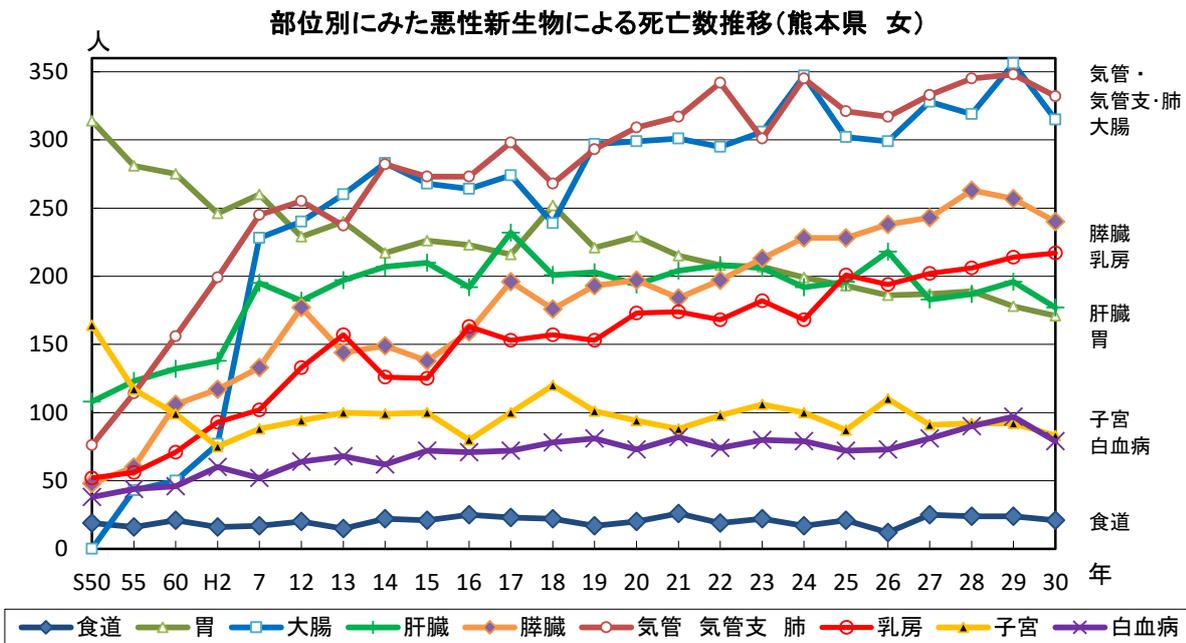
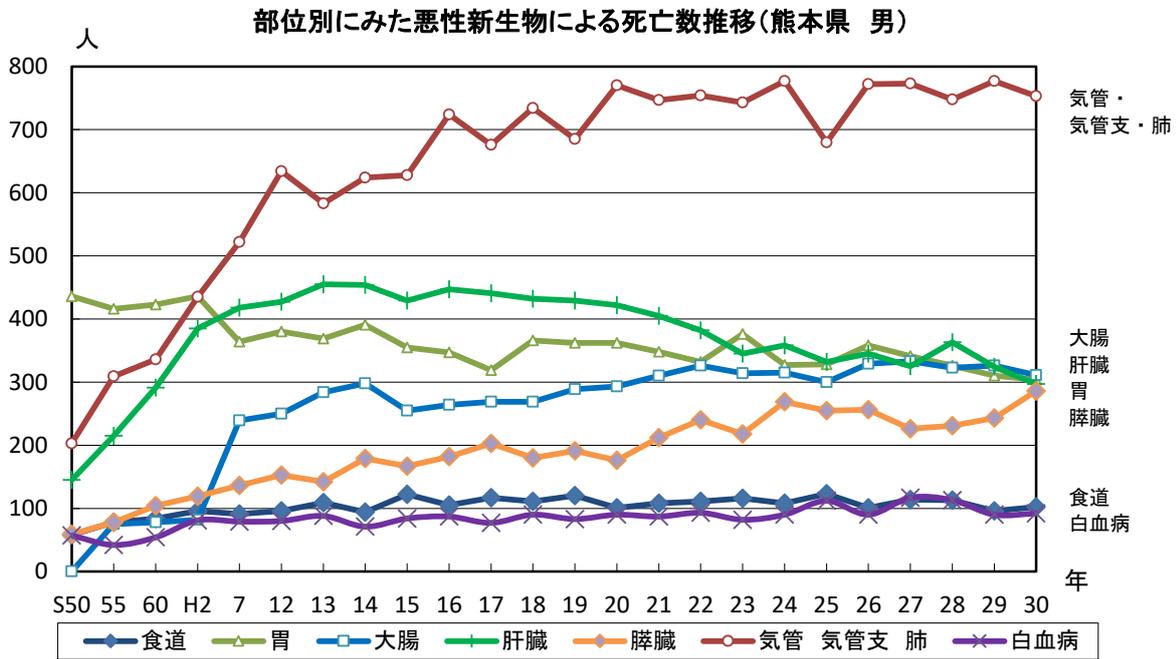
死亡率  
(人口10万対) **年齢階級別死亡率の年次比較**  
(脳血管疾患 女 熊本県)



資料) 厚生労働省「人口動態統計」

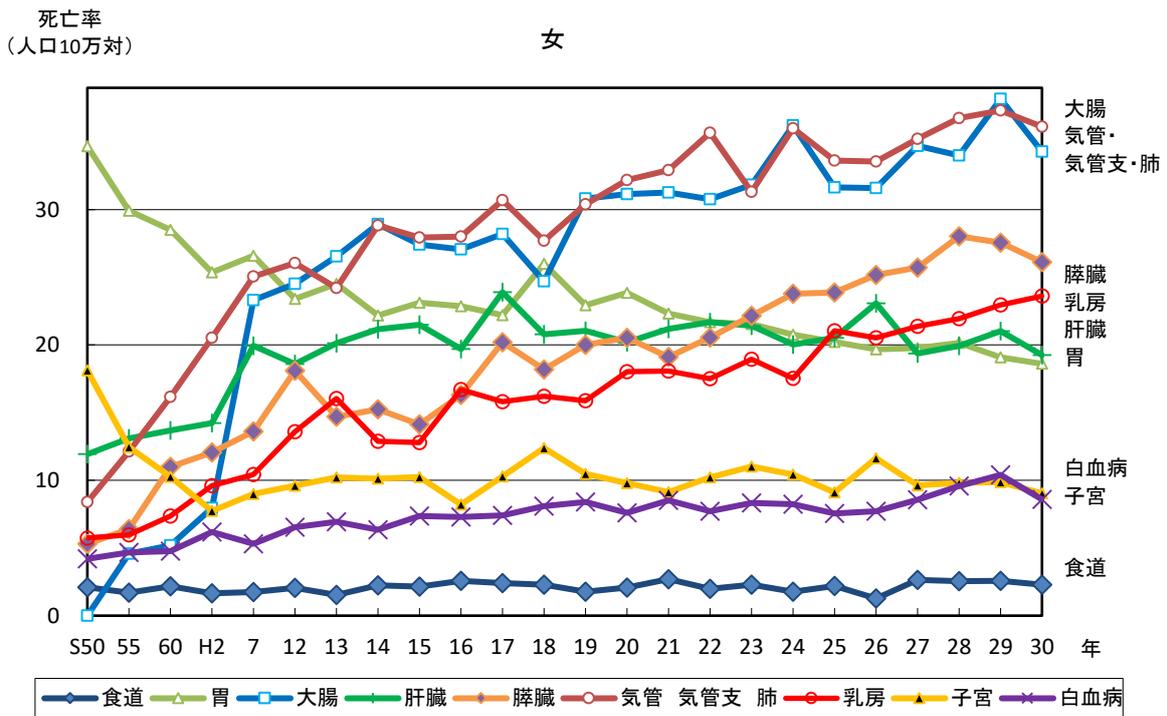
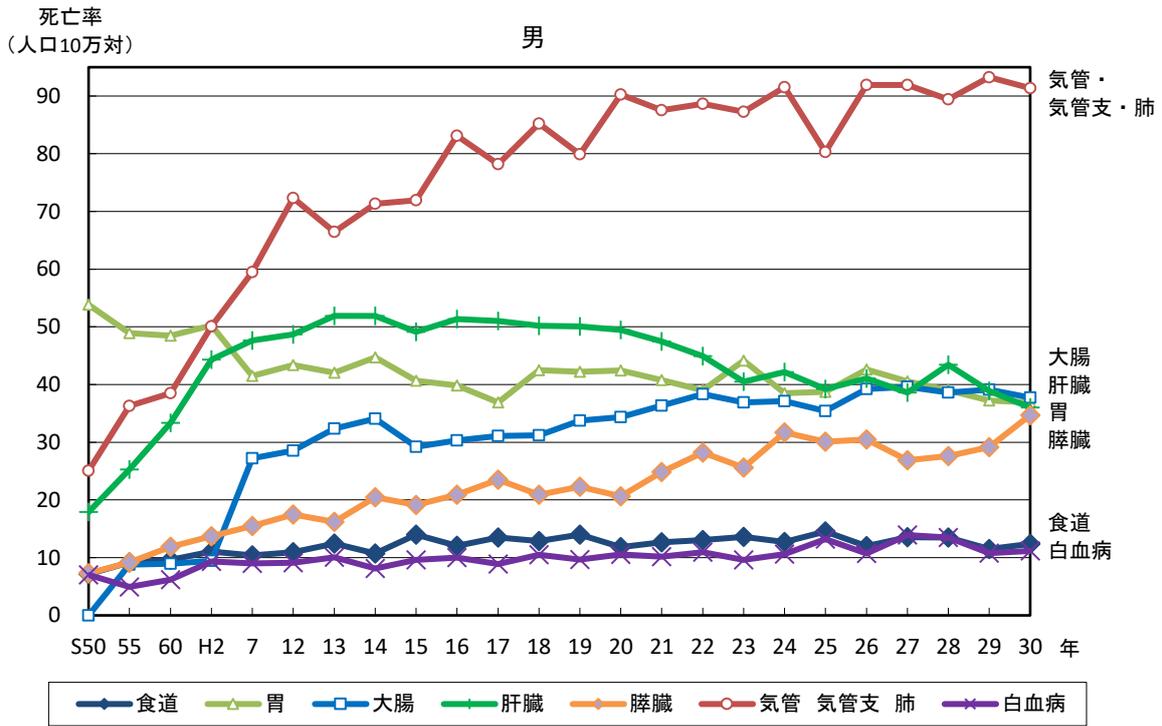
(12) 男女ともに気管・気管支・肺がんが最多（部位別）

本県の悪性新生物の部位別の死亡数を年次推移で見ると、近年、男は気管・気管支・肺がんが最多である。女は平成30年は、気管・気管支・肺が大腸を上回って最多だった。



資料) 厚生労働省「人口動態統計」

### 部位別にみた悪性新生物による死亡率の推移(熊本県)

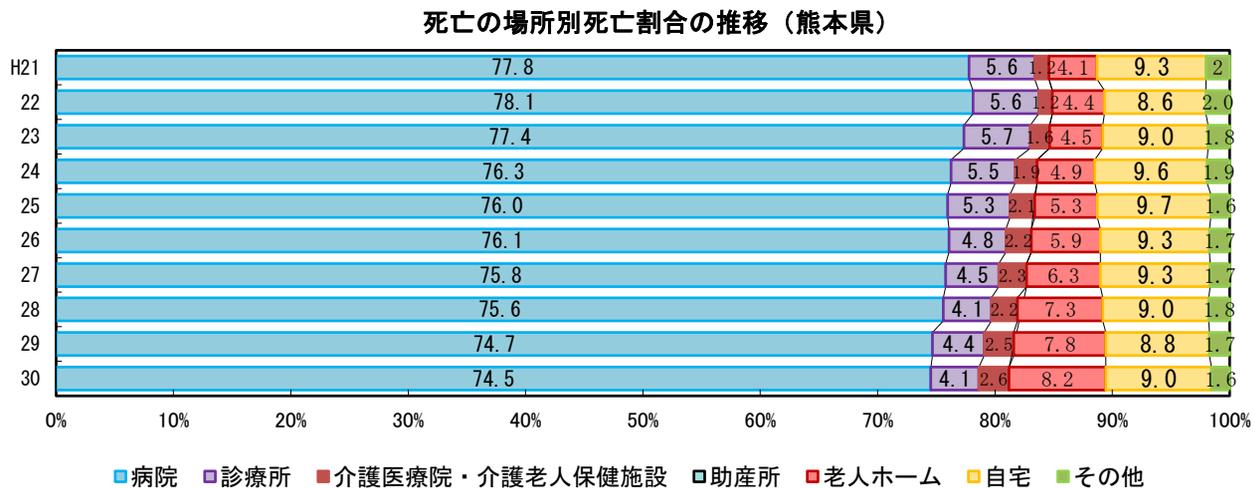


資料) 厚生労働省「人口動態統計」

### (13) 医療機関での死亡が78.6%

死亡の場所別死亡割合の年次推移をみると、「病院」における死亡は、平成30年は74.5%で前年から0.2ポイント減少し、「自宅」における死亡は9.0%で前年から0.2ポイントの増加となった。

また、平成30年の「介護医療院・介護老人保健施設」（※平成30年から介護医療院が追加）における死亡は2.6%で前年より0.1ポイント増加、平成7年から死亡場所の分類に追加された「老人ホーム」は8.2%で、前年より0.4ポイント増加となった。



### (14) 家庭を含む「その他の不慮の窒息」による死亡、高齢者は159人

家庭での不慮の事故による65歳以上の死亡数を事故の種類別にみると、平成30年はその他の不慮の窒息によるものが159人、転倒・転落によるものが132人、不慮の溺死及び溺水によるものが96人であった。

死因分類コード	死 因	65歳以上の死亡者数
V01-X59	不慮の事故 ※	544
W00-W19	転倒・転落	132
W01	スリップ、つまずき及びよろめきによる同一平面上での転倒	99
W10	階段及びステップからの転倒及びその上での転倒	9
W13	建物又は建造物からの転落	6
W65-W74	不慮の溺死及び溺水	96
W65	浴槽内での溺死及び溺水	66
W66	浴槽内への転落による溺死及び溺水	-
W75-W84	その他の不慮の窒息	159
W78	胃内容物の誤嚥	34
W79	気管支閉塞を生じた食物の誤嚥	60
W80	気管支閉塞を生じたその他の物体の誤嚥	63
X00-X09	煙、火及び火災への暴露	11
X00	建物又は建造物内の管理されていない火への暴露	8
X05-X06	夜着及びその他の着衣及び衣服の発火又は溶解への暴露	1

注) ※家庭における不慮の事故以外の不慮の事故を含む。

資料) 厚生労働省「人口動態統計」